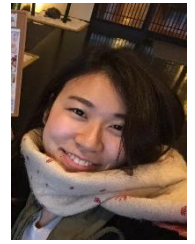


タイ系集団の社会における高齢者の居場所に関する研究

— タイ北部の農村、N村とT村を事例として —

Keywords

タイ北部 高齢者 居場所
農村 宗教 家族



Ak13043 後藤 葵

1. はじめに

1-1. 研究背景

現代、高齢化が進んだことによる問題が増加しており高齢者たちはその存在自体が社会から問題視されている風潮がある。その結果、高齢者の生きがいや居場所が問題になっている。定年退職や精神的・身体的な負担などの理由から高齢者は社会関係上も空間上も周縁化され、その居場所が限られたものになっている。日本はいま超高齢社会となっているが、タイ社会もまた高齢化社会となっており、今後周辺国より早いスピードで高齢化が進むと言われている[大泉 2007]。日本は高齢化が進む前に先進国入りしているが、タイでは発展途上の過程で高齢化が進んだ。そのため福祉面において日本のような保障は期待できない。一方で、日本と比べるとタイには子供が親の老後の面倒をみるという考え方や年長者を敬う習慣などが現在も根付いており、老後の生活や居場所は日本と大きく異なる。これにはタイにおける高齢者の社会的位置づけが関わると考えた。

1-2. 研究目的

本研究は、タイ系社会における高齢者の居場所を明らかにすることを目的とする。

居場所は物理面と心理面の両側面を備えるほか、社会的な位置づけが居場所に結び付く[都筑 1998]。居場所の心理的側面や高齢者の社会的な位置づけは目に見えないが、人類学の象徴論によれば人々はそれを席や儀礼などの行為に表す。本研究では、こうした考えに基づいて図面や空間利用の観察・インタビュー調査をもとに居場所の分析を行う。調査対象地は、タイ北部に位置する2つの農村である。都市部よりも周囲の環境が変わりにくいため、伝統的住居や慣習がより強く残っており地域社会も安定している。そのため、居場所がよりはっきりと表れると考えた。調査ではフィールドワークをおこない、住居内と住居外に空間を分けて調査を進めた。

1-3. 研究方法

チェンマイ県の2村でフィールドワークを行った。

調査地①：チェンマイ県メーチェム郡N村

期間：2016年9月18日から9月22日

人口：隣のP村と合わせて84軒 284人

調査地②：チェンマイ県サンパトン郡T村

期間：2016年9月25日から9月30日

人口：200軒 661人

これら2つの調査対象地において、住居内および住居周辺の実測（平面図、断面図、外構）、各住居の住民へのインタビュー調査を実施した。実測件数および聞き取り軒数は、N村5軒(N①～N⑤)、T村6軒(T⑬～T⑳)の計11軒である。T村に関しては2015年に調査を行った4軒及び2014年に調査を行った10軒も含め計25軒を分析に使用する。インタビュー調査では居住者とその住居に関する基本情報・住居の設備や間取り・宗教・コミュニケーションに関すること等を中心に記録した。さらに、N村とT村それぞれの村人にインタビュー調査を行い、高齢者グループの活動内容を記録した。

1-4. 既往研究

藤原は、居場所はこれまで多くの研究では定義が一貫していないことが問題であるとし、居場所の定義を10の類型に整理した。

中島・廣出・小長井は物理的・心理的両方の側面から居場所を定義している。3人は、居場所を4つのタイプに分類した(図1)。AとBは「個人的居場所」となり、CとDが「社会的居場所」となる。Aは「テリトリー型個人的居場所」である。Bは「非テリトリー型個人的居場所」であり、自分の支配は及ばないが心の落ち着く場所である。Cは「テリトリー型社会的居場所」であり、社会的な場において自分のテリトリーとして自他共に認められている場所である。Dは「非テリトリー型社会的居場所」であり、他者との交流を目的とする心理的にも物理的にも開放されている場所である。本研究では、物理面・心理面両側面もつものは中島・廣出・小長井による4つのタイプの居場所に分類する。以上4タイプの居場所に分類できないものを、藤原による10の類型に分類する。

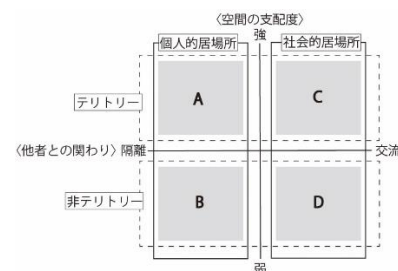


図1 居場所の分類

2. 調査地の概要

2-1. 高齢化社会

世界全体では2005年に高齢化率が7%を超えて高齢化社会を迎え、35年後の2040年頃に同14%を上回り高齢社会になると予測されている。アジア全体では2015年から25年間に、ASEAN諸国全体では2025年から20年間に高齢社会になると予測されており、世界全体の高齢化のスピードを上回っている。ASEAN各国について見ると、高齢化の進展が速い国としてはシンガポール、タイ、ベトナムが挙げられる。シンガポールとタイの場合、既に高齢化社会に突入しており、約20年間かけて高齢化が進み2020-2025年頃には高齢社会となる。この間、65歳以上人口はタイでは約700万人増加するとされている[高橋2015]

2-2. 地理・地形

タイ王国は東南アジア大陸部の中央に位置する。面積は約51万4000km²である。地理的・文化的に異なる特徴をもつ北部・東北部・中部・南部に分けることができる。

気候は亜熱帯モンスーン気候帯に属するため、モンスーン(季節風)の影響を強く受ける。5月後半～10月が雨季、11月～5月前半が乾季となる。

調査対象地である北部はチェンマイを中心に首都バンコクの北方約720Km位置する山岳地帯である。N村はチェンマイ市街から南西に約100Km、T村はチェンマイ市街から南に約30Kmの場所に位置する。

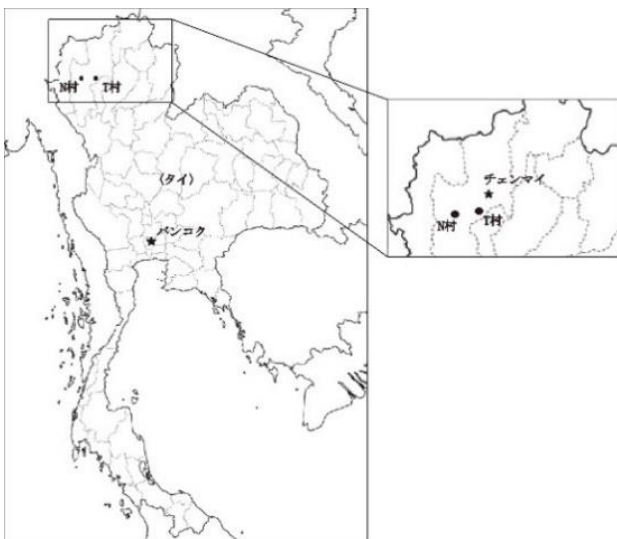


図2 タイ白地図

2-3. 人口・民族

タイの人口は約6884万人である(2015年4月)。タイは多民族国家であり、独自の文化や言語をもつ少数民族が多数暮らしている。ラオ族に次いで人口が多いのがチェンマイを中心とするユアン族で約500万人を数える。今回の調査対象地であるT村にはタイ・クーン族、N村にはコン・ムアン(=ユアン族)が多く暮らしている。

2-4. 信仰・伝統

(1) 宗教

最も多く信仰されているのは上座部仏教(テーラワーダ仏教)で、国民の約95%は仏教徒である。イスラム教徒は約5%、キリスト教徒は約1%のほか、ヒンドゥー教、儒教、道教、ユダヤ教を信仰する者もいる。また、民族によってそれぞれ固有の宗教・信仰(精霊信仰)を有する。上座部仏教と精霊信仰の双方を同時に信仰している。

(2) 家族

タイでは妻方居住が一般的である。農地を受け継いだ末娘が両親と共に暮らす。一方で、先に結婚したキョウダイ、特に姉妹は親世代と同敷地内、あるいは近隣に世帯を構える傾向がある。寝る場所は異なるが、親世帯と子世帯が食事やその他日常の大部分を共にし、子どもの養育や年老いた親の扶養なども相互に協力し合う。

(3) ソンクラーン

ソンクラーンはタイの旧正月(現在は4月13日～15日)を祝う祭りのことである。寺院や自宅の仏像に水をかけてから、祖父母や両親の手に水を注ぎ、お祝いの言葉を述べた後水をかけあう。ソンクラーンの際、ダムファという年長者を敬う儀式がある。

2-5. 北タイの伝統的住居

北タイで一般的なものは、木造の高床式住居である。間取りには、AとBの2つのタイプがある(図3)。Aは階段を上ると半屋外空間または広間がある。さらに進むと廊下を挟んで寝室が向い合わせに2部屋ある。その先にトイレや水浴び場等の水廻りがある。Bは広間の隣に寝室が並んで配置されている。N村ではすべてAの間取りであった。T村にはAとBふたつのタイプの間取りがあった。



図3 間取り例(左:A 右:B)

3. 住居内における高齢者の居場所

3-1. 住居内における物理的側面から見た居場所

図面とインタビュー調査結果を用いて、住居内での目に見える物理的側面から高齢者の住居内での居場所を明らかにする。

(1) 高齢者の寝室の位置

岡本の研究によると、就寝形態は柱の位置、年齢、方位観、右と左の要素によって決まっている。本研究ではこの中で特に年齢に着目した。

タイでは、東か南が最も良い方角とされている。そのため、就寝形態は頭を東か南に向けるというのが全世界に共通するルールとなっていた。2-5で述べたように、寝室は2部屋あり東西に向かいあっている。東側は年長者の寝室、西側はそれ以外の者の寝室である。タイ独自の方位観や観念に基づき、寝室の位置によって重要度が異なる。寝室の位置には家族という社会関係における個人の立場が表れていると考えられ、高齢者は重要な位置づけであることが示されている。

(2) 好んでいる場所

T村におけるインタビュー調査において「住居内において、一番よくいる場所はどこですか」という質問をし、回答で得られた場所を平面図に書き込んだ(表 1)。

よくいる場所は4軒全て1階部分であった。床下部分は風通しが良く、住居の中でも特に過ごしやすい場所である。日中に1階で過ごすため、ゴザを敷くなどしてくつろげる様になっている。近隣住民が訪ねてきた際や我々がインタビュー調査を行う際、1階のよくいる場所に招かれることが多く、来客と交流する場所という要素を含む。床下部分は高齢者にとって快適でコミュニケーションもとれる居場所になっていると考えられる。

表 1 よくいる場所

●または▲:調査対象者 (数字):年齢 ★:よくいる場所 ■:掃き場所		
<p>(1階)</p>	<p>(1階)</p>	<p>(1階)</p>
<p>(よくいる場所) 1階部分: ミシンまたはTVの近く</p>	<p>(よくいる場所) 1階部分: コーヒー(電気調理器の隣に)</p>	<p>(よくいる場所) 1階部分: コーヒーまたはソファ</p>
<p>(1階)</p>	<p>(1階)</p>	<p>T20 建築中</p>
<p>(よくいる場所) 1階部分: ベッド(掃き場所も同じ)</p>	<p>(よくいる場所) 1階部分: 未だでた大きな掃き</p>	<p>(よくいる場所)</p>

3-2. 住居内における高齢者の心理的側面から見た居場所

インタビュー結果を用いて、目に見えない心理的側面から住居内での高齢者の居場所を明らかにする。

(1) 妻方居住慣行と老親のケア

2-4(2)で、タイには末娘が両親と暮らす妻方居住慣行があると述べた。インタビュー調査による家族構成図のデータをもとに、実際にN村及びT村でもこのような傾向がみられるのか分析を行った。

<N村の居住形態>

調査対象者に娘がいるのは5軒のうち3軒である。3軒中2軒は末娘世帯が親と同居しており、残る1軒は同敷地内に末娘が住んでいる。娘がいる住居は全て、娘は親と同居または同敷地内に住んでいた。N村において妻方居住慣行の傾向は強いと考えられる。

<T村の居住形態>

●2014年:10軒のうち4軒がひとり暮らしである。そのうち、娘と暮らしているのは3軒であり、全て末娘であった。

●2015年:調査対象者は、若い人が多く4軒のうち3軒は親が存命であった。3軒のうち親と同居する世帯は1軒であった。娘がいるのは1軒だが、同居していなかった。

●2016年:6軒のうち2軒はひとり暮らしであった。T17の住居は、末娘世帯が同敷地内に住んでいた。娘がいるのは3軒であった。そのうち同居している世帯はなかったが、T18は同敷地内に娘世帯が住んでいた。ここで妻方居住慣行が見られたのは1軒であった。

3年分の調査結果から、N村と比べるとT村は妻方居住慣行の傾向が弱まっていると考えられる。仕事や結婚のために都市部に移住する若者が増えている傾向もみられた。さらに今後、未婚化や出生率の低下により妻方居住慣行が弱まっていくことが懸念される。

(2) 周辺住民との関わり

N1~N5およびT15~T20の住民を対象に、周辺住民との関わりについてインタビュー調査をおこなった。質問項目は(1)遠くに住む家族に会う頻度・場所・内容(2)友人に会う頻度・場・内容の2種類である。

<家族との関わり>

2つの村で、調査対象者は年に1度以上は子どもと会っていた。それは、年に1度ソングラーンの挨拶をするために子どもたちが村に帰ってくるためである。ソングラーンの期間中に高齢者を敬う儀式をおこなう。また、N村よりもT村は子どもと会う頻度が多かった。T村の方が都市部に近く、子どもが帰ってきやすいことが原因であると考えられる。

<友人との関わり>

どちらの村も友人と会う頻度はほぼ毎日であったことから、友人との交流は高齢者の居場所に深く関係していると考えられる。また、会う場所はどちらかの住居である場合が多く、住居が交流の場所になっていると考えられる。

3-5. 子が親のためにすること

「子どもが親のためにしていることは何ですか」という質問に対して得られた回答を分析した。娘は家事や身のまわりの世話であり、息子は仕送りや家の修理などを行っているが多かった。子どもが親のために何かするというのは「タンブン」のひとつであり、子どもたちは様々な形で親に恩を返している。子どもに十分何かしてもらっていると感じている親が多かった。

4. 住居外における居場所

4-1. 住居外における物理的側面から見た居場所

フィールドワークの際、物理的側面から高齢者の住居外での居場所を明らかにする

(1) 村落内で高齢者が集まる場所

T村でのフィールドワーク中、高齢者達が村の「チャオティー」近くに集まっている場に遭遇した。この場所は、村で高齢者が交流する場所として定めたわけではなく、自然と人々が集まって過ごしている。木にはベンチが設置されるなど、くつろげる様な工夫がしてあった。3時間ほどの調査中も、常にその場所に人々がいたこと等から、高齢者にとってこの場所は長居できるほど居心地の良い居場所であると考えられる。

(2) 葬式の際の席

まず、最も棺に近い位置から僧侶、親族、村の長老たち、村の男性、村の女性、外部の者という席順になっていた。私たち調査員は、外部の者が集まる位置に座った。

僧侶は神聖なものであり、近いほど重要な席である。親族を除くと、村落内で長老は最も重要な位置づけであることが分かる。

4-2. 住居外における心理的側面から見た居場所

(1) 高齢者グループ

N村の高齢者グループは、学校のクラブ活動のような印象を受けた。活動内容は運動などで、高齢者たちが自主的に活動していた。一方でT村は、老人会という名が付いており委員会のような印象を受けた。活動内容は金銭面の補助や老人学校の運営などである。1人のリーダーが決めたことにその他の高齢者が参加するというものであった。方針は違うが、どちらの村も高齢者グループの自主的活動が高齢者の居場所を作り出していると考えられる。N村には高齢者が所属するグループが居場所となる。T村では儀礼の席次や集まる場所など村全体で高齢者の存在を尊重しており、両村とも村の中に心理的居場所があるといえる。

4-4. カオ・パンサーの習慣

カオ・パンサーの日(10月15日)に、若者が自分の祖母又はお世話になった高齢者等に、贈り物をあげて感謝をのべる習慣がある。この儀式は高齢者への感謝の気持ちを目に見える形で表現する、タイの特徴的な習慣である。直接会いに行くことで、会話や触れ合うことができる。この習慣は、儀式的な要素だけでなくコミュニケーションの要素も含んでいる。この習慣によって、高齢者は自信が社会的に尊重されていると感ずることができる。

5. 考察

分析結果から、物理面・心理面両側面の意味をもつものを中島・廣出・小長井の居場所タイプに分類し、そうでないものを藤原による居場所の定義に分類した。

●中島・廣出・小長井の居場所タイプ

(住居内)

①高齢者の寝室の位置:高齢者の寝室の位置として自他共に認められている場所と捉えたCタイプである。

②好んでいる場所:高齢者が好む床下部分は、居間のような部分であり家族や近隣住民も利用することが多い。物理的にも心理的にも開放されているDタイプである。

③友人との関わり:友人とはほぼ毎日、お互いの住居で会うという人が多かった。友人の住居は、自分の支配は及ばないが心の落ち着く場所として捉えたBタイプである。

(住居外)

①高齢者が集まる場所:気の許せる相手と交流ができる場であり、友人の住居と同様にBタイプである。

②葬式の際の席:寝室と同様に、自他共に認められている場所と捉えたCタイプである。

●藤原による居場所の定義

上記の居場所タイプに分類できないものを藤原による居場所の定義に当てはめた。

(住居内)

家族に関しては、妻方居住慣行と老親のケア・会う頻度・子が親のためにすることという3つの要素がある。このように多くの要素から、家族内には、居心地がよく、安心していられる人間関係としての居場所が存在する。

(住居外)

①高齢者グループ:役割が与えられる、所属感や満足感が感じられる場としての居場所が存在する。

②カオ・パンサーの習慣:村落内にも居心地がよく、安心していられる場もしくは人間関係が存在する。

6. おわりに

タイ系社会には、高齢者の居場所となる多くの要素が存在した。なかでも住居は重要で、物理的・心理的の両側面をもつ居場所が多く存在することが明らかとなった。高齢者を敬うという考え方は、伝統的な習慣や儀式等で表現されることで、自他共に認識できる。目に見えないものを、目に見える形で表現することがタイの高齢者達に居場所を感じさせ、観念を風化させない要因になっているのではないだろうか。

参考文献

- 1) 都筑学「青年心理学から見た『居場所』の問題」日本青年心理学会第6回大会発表論文集 1998年
- 2) 岡本麻梨子「ジェンダーによる空間の使い方に関する研究 ―タイ北部のS村、T村を事例として―」2014年度芝浦工業大学工学部建築工学科卒業論文
- 3) 内閣府「平成27年版高齢社会白書」
- 4) 藤原靖浩「居場所の定義についての研究」教育学論文第2号 2010, pp169-175
- 5) 中島喜代子・廣出円・小長井明美「『居場所』概念の検討」三重大学教育学部研究紀要2007, 58, pp. 88-89.